

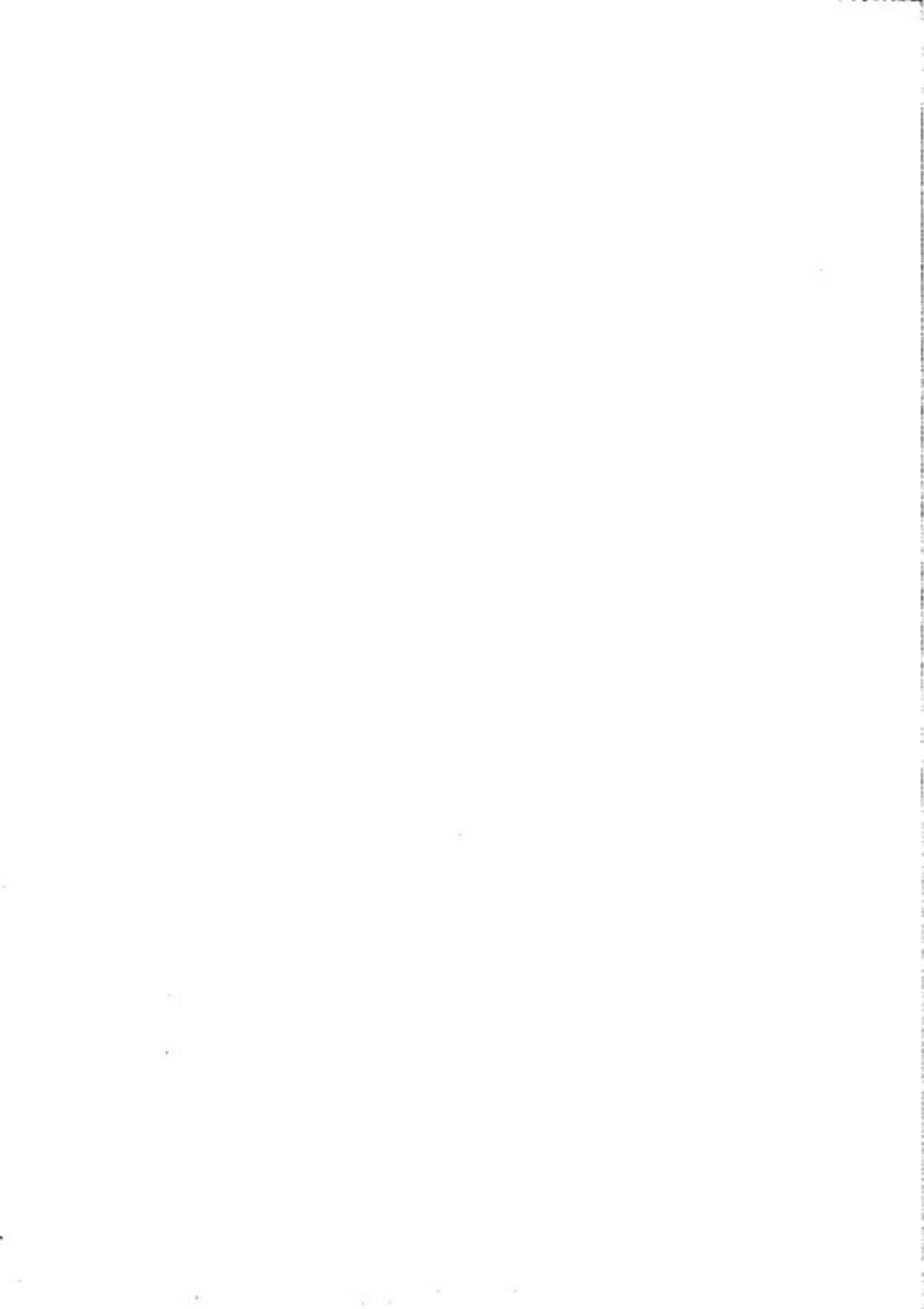
泉大津市文化財調査概要 3

豊中遺跡発掘調査概要 II



1978.3

泉大津市教育委員会



泉大津市文化財調査概要 3

豊中遺跡発掘調査概要 II

1978.3

泉大津市教育委員会

は じ め に

泉大津市は、市民歌にも歌われているように、小津と呼ばれていた時代より栄え、高い文化遺産を誇る地域として知られています。しかしそれより以前、考古学調査によらなければ判明しえない時代においても、人々の生活の場として拓けていたのは、従前の調査から見ても明らかであります。それを端的に物語っているのが、文化財でありますが、我々はそれから日本の歴史や文化の発展を正しく理解し、当時の人々の生き方を学び、今後の進むべき進路の指針としなければなりません。そのためにも我々は、これら文化財を大切に保存し、後世の人々に継承すべき責任があります。

豊中遺跡は、日本国家の基礎が築きあげられた古墳時代における和泉の様子や、現在の泉大津市の根源ともなる中世の集落をよく伝えていますが、まだまだ解明されていない部分も多々あります。幸にして近年関係各位のご尽力によって、貴重な埋蔵文化財が発掘され、昭和52年度においても刮目すべき成果をあげることができました。ここにその一部をまとめて刊行し、ご報告にかえたいと存じます。本書が和泉の歴史を追求する上で、少しでも役立てば幸甚であります。

最後に、調査にあたってご協力を賜わった土地所有者の皆様をはじめ、多數の方々のご援助を深く感謝する次第であります。

泉大津市教育委員会

教育長 中辻 捨二郎

例　　言

1. 本概要報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市豊中に所在する豊中遺跡の範囲内において、住宅建設に先立って実施した発掘調査記録である。

2. 本調査は、国庫補助事業、および府補助事業（総額5.000.000円 国補助率50%、府補助率25%市負担率25%）として計画し、実施したものである。

3. 本調査は下記の構成で実施した。

調査担当者 坂口昌男（泉大津市教育委員会社会教育課）

調査員 佐藤正則

事務局 泉大津市教育委員会社会教育課

4. 調査は昭和52年度事業として、昭和52年8月1日
に着手し、昭和53年3月31日に完了した。

5. 本書の作成は、坂口昌男、佐藤正則が分担した。
なお、作成にあたっては、遺物整理に中口典子氏の協力
を得た。

6. 本書の遺物写真は、財団法人大阪文化財センター
池上事業所写真資料室（中西和子室長）が撮影した。

7. 本書では、写真・実測図に共通する遺物番号を付
け、本文でもこの番号を用いた。

8. 本書の調査・報告にあたっては大阪府教育委員会
のご協力を得た併せて感謝する次第である。

目 次

第1章 遺跡の環境と位置.....	1
第2章 周辺の遺跡.....	3
第3章 調査の概要.....	5
第1地点	5
第2地点	10
第3地点	14
第4地点	17
第5地点	19
第4章 まとめにかえて.....	25
第5章 遺物.....	26

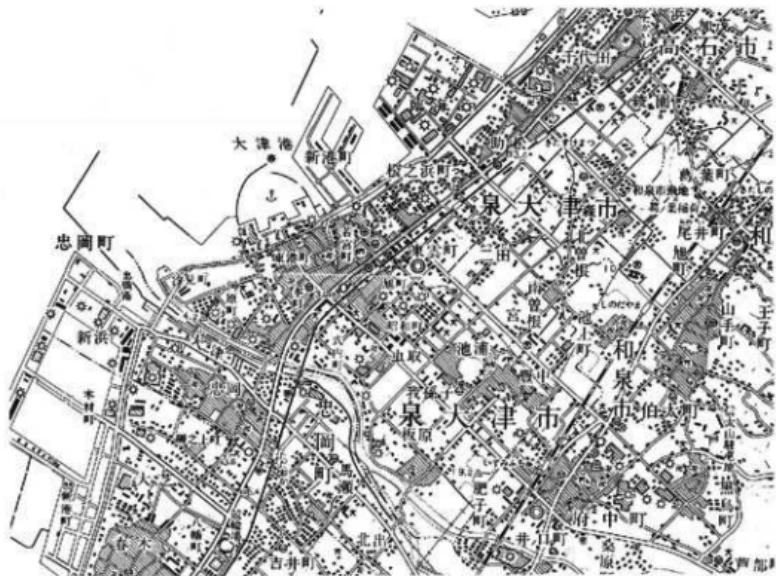
挿 図

第1図.....	泉大津市地形図
第2図.....	調査地点
第3図.....	第1地点遺構図
第4図.....	第1地点出土遺物
第5図.....	第1地点溝B断面図
第6図.....	第1地点出土遺物
第7図.....	第2地点遺構図
第8図.....	第2地点井戸1出土
第9図.....	第2地点住居跡
第10図.....	第2地点住居跡内出土遺物
第11図.....	第3地点遺構図
第12図.....	第3地点井戸1井戸枠使用瓦
第13図.....	第3地点井戸1出土
第14図.....	第4地点遺構図

第15図	第4地点出土遺物
第16図	第4地点出土遺物
第17図	第5地点遺構図
第18図	第5地点井戸1
第19図A	第5地点井戸1出土
第19図B	第5地点井戸1出土
第20図	第5地点井戸2
第21図	第5地点井戸3
第22図	第5地点井戸3井戸柵
第23図	第5地点井戸3出土

図 版

1	第1地点 遺構・井戸1
2	第1地点 遺構・井戸6
3	第2地点 中世遺構・住居跡
4	第3地点 遺構・井戸1
5	第4地点 遺構・井戸1
6	第5地点 遺構・井戸1
7	第5地点 井戸2・井戸3
8~11	出土遺物



第1図 泉大津市地形図

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1の地形図を複製したものである。(承認番号) 昭52近復、第42号」

第1章 遺跡の環境と位置

大阪府泉大津市は、西部を国道26号線と私鉄南海本線が平行して走り、それに沿って市街地が形成されている。地場産業として織物工業が盛んで、特に毛布の生産高は全国の約95%を占めている。東部は水田地帯が残されているが、土地区画整理事業が実施されている部分もあり、宅地開発の波が押し寄せ、市街地となりつつある。大阪平野の南部にあたる地域は、早くから開けており、条里制の施かれた跡も依然と残され、農業を生活の基盤としていたことが窺われる。昭和48年に大阪で開催された日本万国博覧会を契機として、以後阪南地域も開発のテンポは急速にすすみ、商業都市大阪のベッドタウンとしての住宅建設にも著しいものが見られる。また、大阪と和歌山を結ぶ国道26号線は、近年の経済発展と流通の活発さから、その交通量は限界に達し、マヒ状態となった。建設省は、その緩和を図り今後の増大を見込んで、万国博開連事業として第2阪和国道を計画した。この国道の建設工事は完了していないが、沿線の各市においては、早期

開通が望まれ、土地区画整理事業が併せて実施されている。第2阪和国道のルートは、平野部の水田地帯が選定されたため、各所において遺跡内を通過することになり、発掘調査が実施される結果となつた。^{注①} 豊中遺跡もその中の一つであり、国道敷内を大阪府教育委員会が発掘調査した結果、古墳時代に属する集落跡の存在が判明した。その後の調査により、遺跡の範囲は国鉄阪和線和泉府中駅より北へ900m、南海本線泉大津駅から東南東の方向約1800mの地点を中心として、南北約1000m、東西約800mの規模である。

この遺跡を地理的に見てみよう。背後に和泉山脈が東西に走り、そこから北へ向かっていくつかの丘陵が伸びている。信太山丘陵もその一つで、この丘陵から更に北西に向かって低位段丘が張り出し、その上に遺跡が存在している。ここには他にも、弥生時代より連續として人々の生活が営なまってきたことを示す遺跡が多数存在する。和泉の地形図を眺めると多数の溜池が存在することに気が付く。これらの大半は、わずかな谷部分に大きく堤防を築いて造られており、水田開発と深い関係があったが、現在その大半は埋め立てられている。この地方は、「イズミ」と呼ばれるとおり、湧水の豊富な地域であった。しかし旱魃が続き、湧水も減少し、水飢饉が生じたことも疑いのないことであろう。多数の農業用溜池が築造されているのは、瀬戸内式気候に属し、降雨量は少なく、大きな河川も存在しないためである。

第2章 周辺の遺跡

和泉地方の平野部における気候は温暖で、降雨量も概して少なく、瀬戸内式気候に属している。そのため生活の場・生産の場として早くから開けていた。近年の開発により、水田地帯において従来から知られていた遺跡の範囲は、より正確なものとなった他、新たに発見された遺跡もあり、各所で発掘調査がなされている。^{注②}以下豊中遺跡昭和52年度発掘調査を報告するにあたり、周辺の遺跡の大略を時代順に紹介してみる。

旧石器時代

泉大津市内において、この時代の遺物は発見されていない。東接する和泉市で、昭和40年に父鬼町の海拔約390mの地点において、サヌカイトの石核や剝片が発見された。^{注③} 続いて堺市野々井遺跡・岸和田市海岸寺山遺跡等、丘陵部で石器や剝片が出土した。また高石市大園遺跡では、洪積層から発見されている。この時代は狩猟・採集および捕獲が主であるため居住地の定着性はそれほど考えられず、広範囲な移動が考えられ、泉大津市でも今後発見される可能性はある。

縄文時代

この時代の遺構は今のところ検出されていないが、土器片の資料は増加しつつある。豊中遺跡内に存在した上池は、底は旧河道であったため砂利層が見られた。その河川のベースを形成している砂利層中より、縄文時代中期に属する土器片が出土した。^{注④} また数片が同じく豊中遺跡の砂利層から発見されている。いずれも上流部より移動してきたものであるらしく若干磨耗している。付近でこの時代の遺構の存在が予想される。泉大津市の周辺部を見ると、岸和田市葛城山頂で中期、箕土路遺跡から中期初頭、春木八幡山遺跡から後期の土器が発見されており、和泉市信太山^{注⑤}丘陵から打製石匙、府中遺跡から土器片、また堺市四ツ池遺跡から後・晚期の土器が出土している。このように和泉地方において丘陵部や台地上、砂丘などから遺物は発見されているが、遺存状態はあまり良好でなく、明確な遺構も検出されていないため、和泉地方の縄文時代は未だ充分に把握されているとはいえない。

弥生時代

北九州に始まった弥生文化は急速に東進し、近畿地方に伝播された。和泉地方においては、堺市四ツ池遺跡が縄文時代後・晚期から弥生時代へと引き続いて存続し、縄文文化と弥生文化との

かかわりあいを解明する上で重要視される。この四ツ池遺跡に続いて出現するのが、泉大津市池浦遺跡で、弥生時代畿内第1様式中段階のことである。この集落は湿地帯に面しており、人工の溝が掘られ、居住地と区画し、排水用に利用されていたと思われる。第1様式新段階になる頃には、東方約1kmの地点へ主力の移動したのが池上・曾根遺跡である。この遺跡は、前期から後期へと続く日本でも最大級の弥生時代集落跡である。とりわけ中期には集落の周囲を大溝で開み、しかもその溝は、埋もれるにしたがい掘り直されたり、あるいは外側に掘られたりして、集落の発展段階を解明する上で貴重な遺跡となっている。尚昭和51年4月26日に史跡に指定された。

古墳時代

泉大津市には、現在のところ古墳は見あたらないが、昭和29年発行の地形図(25000分の1)には、塚らしいものが見られるところから、削平され消滅してしまった可能性がある。墓として古墳の他に方形周溝墓が弥生時代より引き続いて築造されている。七ノ坪遺跡には、この時代に属する方形周溝墓が発見され、古墳に被葬される者と、方形周溝墓に被葬される者との間に差違が見られる。

集落跡としては、豊中遺跡・七ノ坪遺跡・東雲遺跡があげられる。特に豊中遺跡においては、弥生式土器畿内第5様式の形態を強く残す、粗い叩き目で乳茶色の、いわゆる和泉の土器と、河内(生駒山麓)より運ばれた細かい叩き目の茶褐色で金雲母が混る薄手の土器とが共存し、弥生時代から古墳時代へと移行する時期に位置付けられる。また住居群も數カ所で確認されており、村落としてのあり方を示唆している。東雲遺跡は海岸部に近い集落跡である。

奈良・平安時代

この時代の顕著な遺跡の存在する遺跡は発見されていないが、豊中遺跡の南に接して和泉国府跡が、西に接して白鳳元年創建の穴師神社や、宝龜年中に創建されたという穴師薬師寺跡が存在し、これらの付近に集落が形成されていたことは疑う余地がない。黒色土器片等が、豊中遺跡の遺物包含層から検出されている。また平安時代末頃に属する瓦が出土しており、現在も字名で残る大福寺が、この頃に建立されたと考えられるが記録は何も残されていない。

中世

中世遺物として、瓦器片・磁器片・瓦片・土釜片などが豊中遺跡・穴田遺跡・穴師神社遺跡・板原遺跡等から出土している。明確な建築物跡は未だ確認されていないが、種々の形態の井戸が発見されており、今後の調査によって、より明らかにされるであろう。古池遺跡では、鎌倉時代^{注③}の倉庫跡が発見されている。

第3章 調査の概要

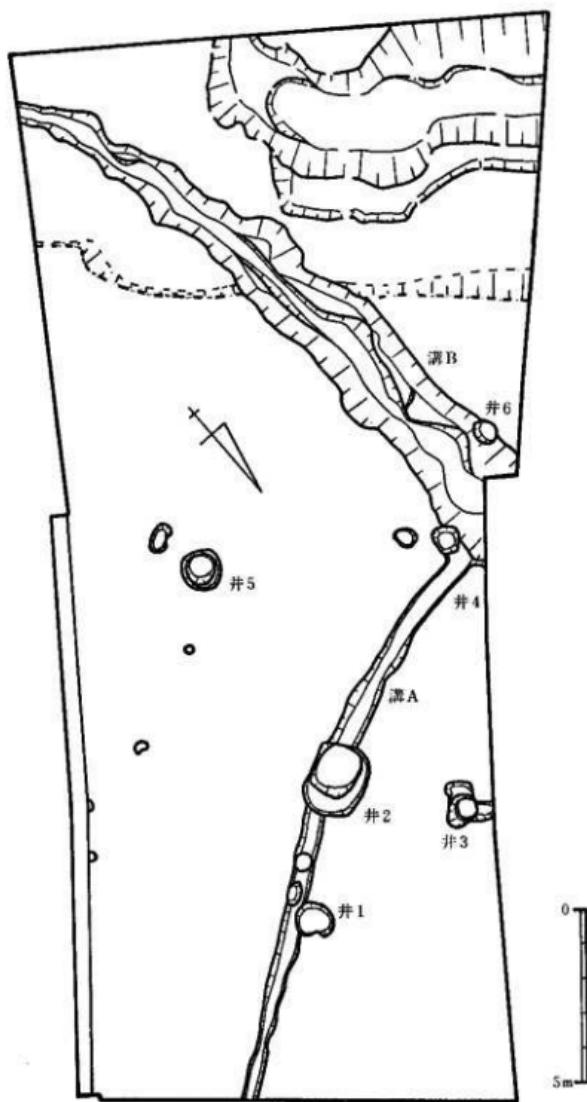
本年度は、5箇所を対象に第1地点～第5地点（第2図）とし、以下地点毎に報告する。



第2図 調査地点

第1地点 泉大津市豊中249-1

既に宅地造成がなされていたため、盛土を重機で除去した。しかし、その土量が大量であったので、2回に分け発掘調査を実施した。



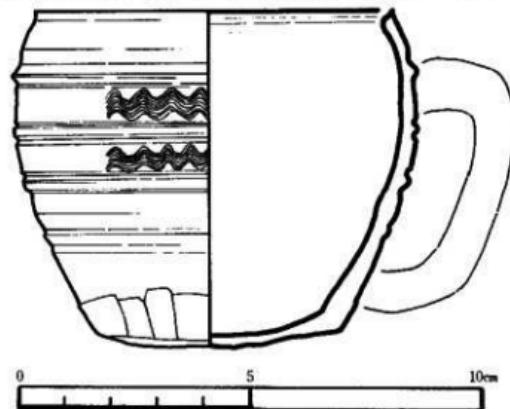
第3図 第1地点造構図

盛土（90cm）、耕土（15cm）、床土（10cm）を除去すると、中・近世の整地層（5cm）が存在する。この層内には、古墳時代の遺物である須恵器（15）や土師器片と、中・近世遺物の瓦器片や陶器片が検出された。この整地層を除去すると、古墳時代の造構面となる。発見された造構（第3図）は、井戸・溝が主で古墳時代前期に属するものである。

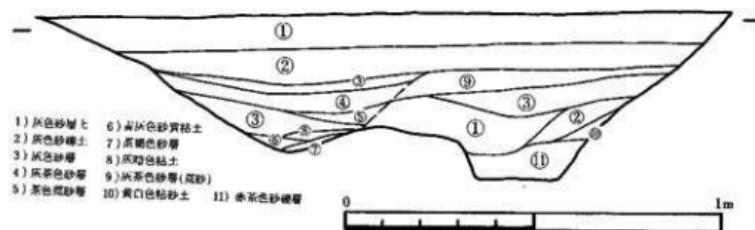
溝A 本地点内の北側部を流れる幅約40cm、深さ10~15cmの規模の溝である。方向は、北東位から南西位に至るが、中央部付近でやや西に振る。

そして、その西端は溝Bにつながる。溝内堆積土は、砂が主に見られたが、西方へ行くにしたがって地山と同色を呈する黄茶色粘砂土が堆積していた。出土遺物としては、叩き目を有する土師器蓋（？）の肩部片が若干検出されたのみである。

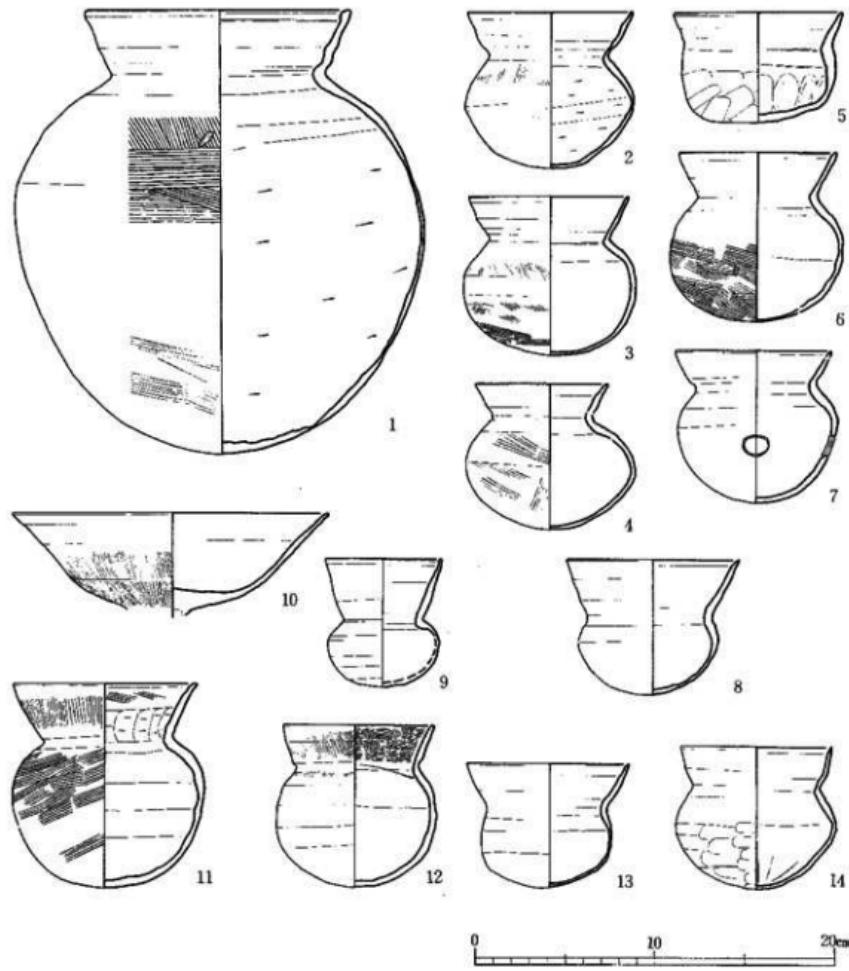
溝B 南北に流路方向を持ち、幅約2m、深さ約50cmの規模を有する溝である。しかし、南半分は後世の整地により、上部が削平され、底部が残存しているのみである。溝内堆積土は、地山（黄茶色砂質土）とよく似ており、やや暗灰色を呈す。下層部は、砂及び小礫が堆積していた。出土遺物は、古式土師器の細片が少量発見されたのみである。



第4図 第1地点出土遺物



第5図 第1地点溝B断面図



第6図 第1地点出土遺物

井戸 1 溝Aの西肩部を切り込み重複するものである。規模は、直径約1.3m、深さ約1mを測る。形は、上面では不整形なやや円形を呈しているが、底部においては直径80cmの円形となる。井戸内堆積土は、上部で暗茶色土が約30cm、その下は灰茶色土、暗灰色粘土が見られた。出土遺物としては、上部で土師器細片が若干、底部近くで布留式土師器壺（1）の破片がほぼ1個体分発見された。

井戸 2 溝Aが埋没した後、掘られている。その規模は、上部で長径約2m、短径約1.4mの楕円形を呈し、深さ約0.1m、更に中心部で直径約1m、深さ約30cm掘られた井戸である。堆積土は、井戸1と同様であった。出土遺物は、上部では多数の河原石と土師器細片や小型丸底壺（3・4・5・6・8）、下部でも小型丸底壺（2・7）が検出されている。

井戸 3 井戸2の北西において検出。上部平面はやや円形を呈する。掘り方は直径約1.2m、深さ20cmで、直径65cm、深さ65cmの井戸枠を持つ円形の井戸で、堆積土は、灰茶色砂質土である。出土遺物として、上部に布留式土師器の細片や高杯の杯部（9）、埴（10）などがあった。

井戸 4 溝Aと溝Bの接続する位置において検出。その規模は、直径75cm、深さ60cmで井戸枠は存在しなかった。堆積土は上部より下部まで灰茶色砂質土が見られた。出土遺物として、下部より小型丸底壺（11）が検出された。

井戸 5 溝Aの南側に位置する。直径1.2m、深さ58cmの規模の井戸であり、井戸枠は検出されなかった。堆積土は上部から下部まで灰茶色砂質土が見られた。出土遺物として、布留式土師器の壺破片と小型丸底壺（12）がある。

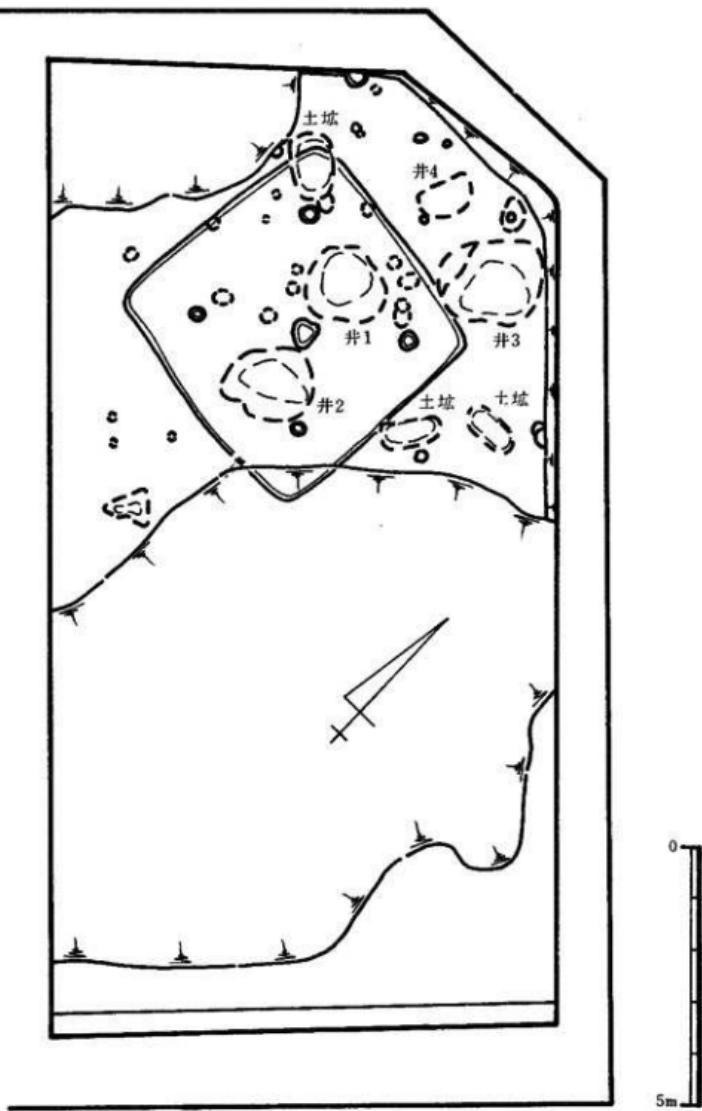
井戸 6 溝Bの西側肩部分に位置し、直径60cm、深さ50cmを測るが井戸枠は検出されなかった。堆積土は茶色砂質土である。出土遺物として小型丸底壺（13）、埴（14）がある。

落ち込み 西隅に位置する遺構である。上部は落ち込み状の形をしているが、下部では溝になっており、二つの遺構が重複しているとも考えられる。堆積土は大きく二層に分けられる。上層は茶色土で中世の遺物を多数含み、短期間のうちに廃棄されたような出土状態であった。下層は茶色砂層で、須恵器、土師器の破片が出上した。

ピット 検出したピットは大小さまざまであったが、そのいづれもが浅い。井戸と同時に掘削されたとは言いがたいが、それを断定する資料に欠ける。又、建築物としてはまとまりを持たない、目的不明のピットである。

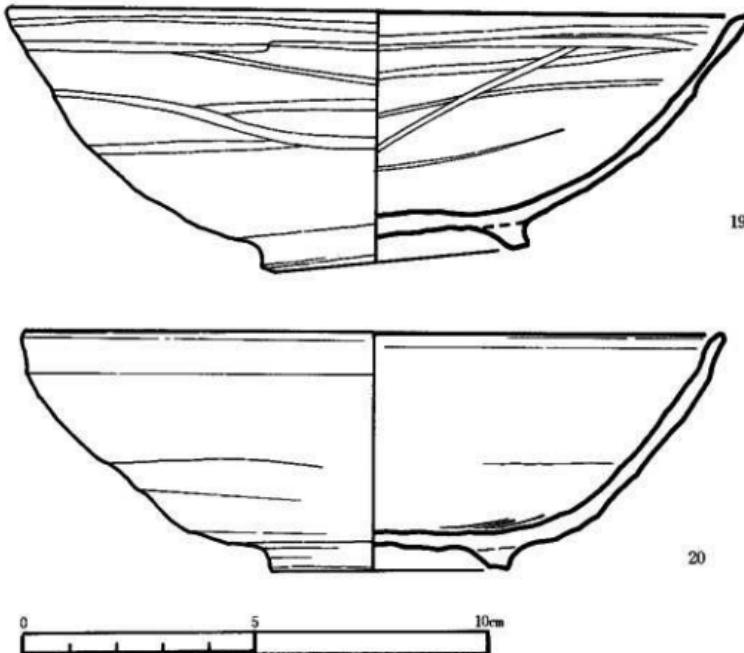
第2地点 泉大津市豊中406-1

住宅建設に先立つ発掘調査である。既に宅地造成による盛上がりが行なわれていた。盛土下に耕土（20cm）、床土（4cm）、遺物包含層である灰茶色土（5cm）の順に層序が見られた。しかし、調査地の半分は区画整理事業の工事によって擾乱され、遺構検出は不可能であった。検出した遺構は、古墳時代前期に属する竪穴住居跡とそれに重複した中世の井戸が4、ピット、土括状遺構が3である。



第7図 第2地点遺構図

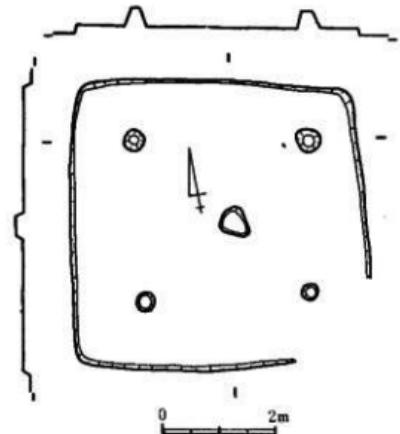
井戸 検出したのは4個である。そのいづれもが、井戸の掘り方か、もしくは井戸棒の抜き取り跡と思われる。直径1.2m～1.8m、深さ80cm～1mを測り、形はやや変形した円形を呈する。全ての遺構内堆積土は、遺物包含層の灰茶色土に、黄色粘質土がブロック状に混じったものであった。この中から、中世の瓦器碗（19・20）や土師質灯明皿破片が出上した。



第8図 第2地点井戸1出土

土壙 検出数は3個である。長径1m～1.2m、短径60cm～90cm、深さ20cmを測り、地山を切り込み椭円形を呈している。茶灰色土が堆積しており、遺物はいづれも検出されなかった。

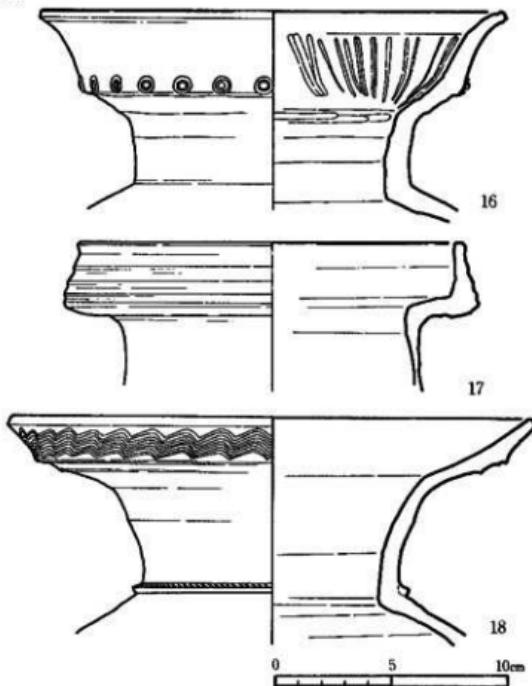
ピット 検出数は30個である。直径20cm～30cm、深さ10cm～25cmを測る。それらには、中世の時期以外のものも含まれている。中世に属するものは、ピット内堆積土が灰茶色土で、深さも浅く10cm内外を測る。しかし、中世以外のものは、ピット内堆積土がやや黒く、暗茶色上で深さも20cmを越える。いづれのピットからも、遺物の検出は見られなかった。



第9図 第2地点住居跡

の井戸)により、床面の3分の1近くが失なわれていた。遺物は、炉跡内から装飾を施す上師器壺口縁部が2点(16, 18)と、飾りのない土師器壺口縁部1点(17)が出土した。

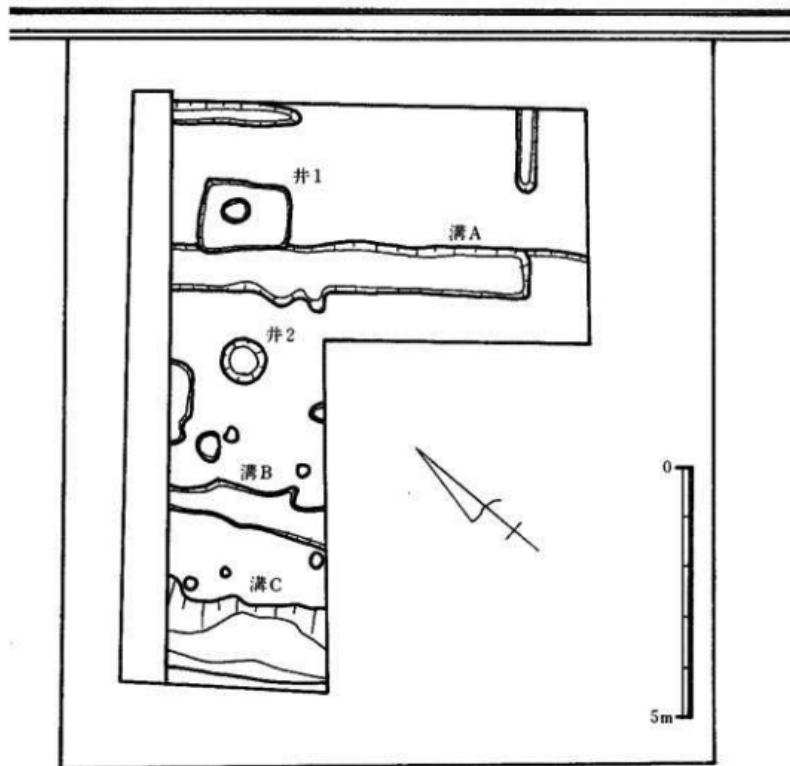
竪穴住居跡 調査地点内のやや北西部で発見された。平面形は4.5m×5mを測り、ほぼ南北を指していた。床面の対角線上に4個の柱穴を持ち、中央部には炉を有する。炉跡の大きさは、50cm×60cm、深さ約15cmである。遺構内堆積土は、地山とほとんど変わらず、わずかに茶色を示していた。壁の立ちあがりは約10cm近くあり、周溝は存在しない。後世の遺構(中世



第10図 第2地点住居跡内出土遺物

第3地点 泉大津市豊中314-6

住宅建設に先立つ調査であり、既に宅地造成が行なわれていた。造構面までの層序は、次のとおりである。盛上10cm、耕上4cmで、灰茶色砂質土（遺物包含層）が5cmあり、須恵器・土師器・中世遺物を含み、その下に造構面がある。検出した造構は、溝・井戸・ピットで、中世の時期に属するものである。



第11図 第3地点造構図

溝A 北西より南東に走り、幅1m、深さ20cmを測る規模である。堆積土は、茶灰色砂質土で地山とほとんど変わらず、底部において砂が見られた。出土遺物は、瓦器・土師質灯明皿の破片

がわずかである。

溝B 溝Aよりやや北へ振り、溝の肩の線は曲線を呈している。堆積土は溝Aと同様である。遺物は、土師器の細片が少量出土したのみであった。

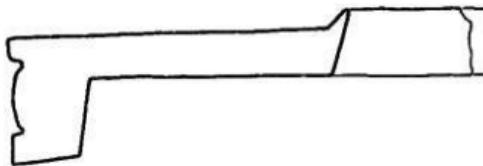
溝C 南隅に位置し、溝Bの南西側にはほぼ平行に流路をとる。幅1.5m、深さ90cmを測り、直文断面形はU

字形に近いものであった。

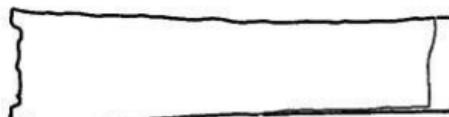
堆積土は二層に分かれ、上

層は20cmの茶灰色砂質土で地山とほぼ変わらず、下層は約70cmで砂が堆積していた。出土遺物

は、上師器の細片のみである。



21



井戸1 溝Aの北側に接する位置にあり、上面は方形を呈している。掘り方は1.5m四方を測り、中心部

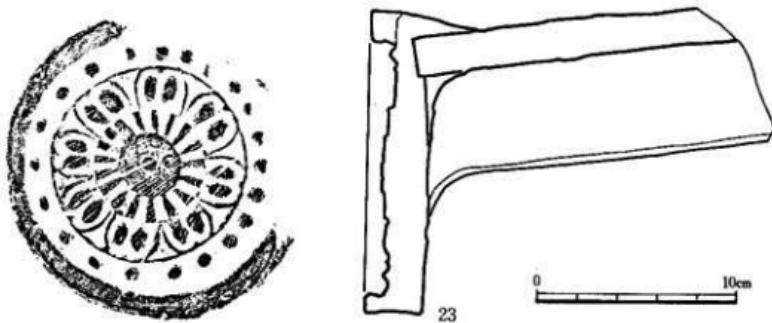


22



第12図 第3地点井戸1井戸枠使用瓦

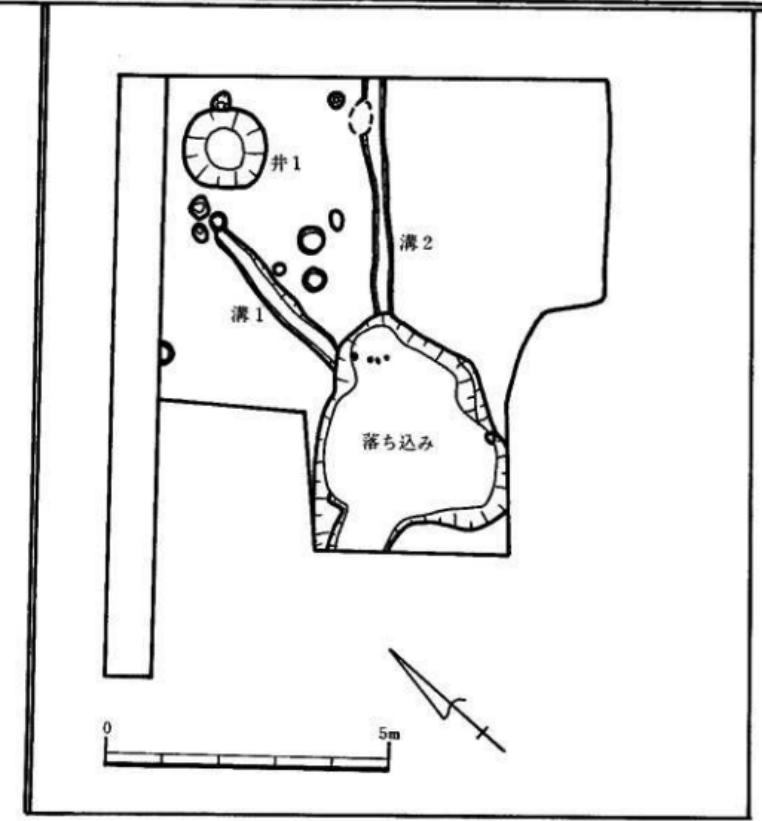
深さ1.7mの井戸が存在する。そして、底は砂礫層まで掘削されていた。井戸枠は上面より1.2mまで平瓦(21・22)を積み、その下は竹製のタガが巻かれた杉材の井戸枠が据えられていた。井戸内堆積土は、上部30cmが地山とほとんど変わらず、下部は砂と暗灰色粘土が交互に存在した。遺物として、軒丸瓦(23)や曲物片が出土している。



第13図 第3地点井戸1出土

井戸2 溝Aの北西に位置し、上部直径90cm、底部直径50cm、深さ50cmの規模でスリ鉢形を呈する。井戸枠は検出されなかった。出土遺物は、瓦器・土師器の細片である。

ピット 溝Aと溝Cに挟まれた部分に所在するが、相互の関係は不明である。直径10cm~30cm、深さ5cm~20cmの範囲内のものである。出土遺物は、わずかの須恵器および土師器の破片だけである。



第14図 第4地点遺構図

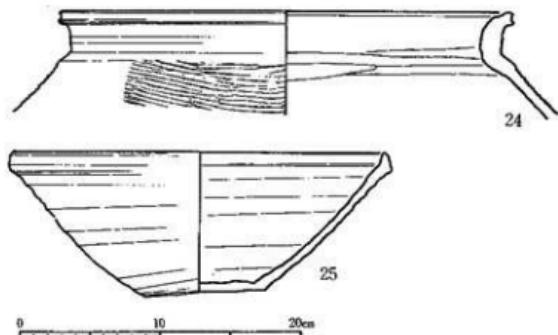
第4地点 泉大津市豊中314-9

住宅建設に先立つ事前調査で、第3地点と道路を隔てて南東に隣接する地点である。

既に宅地造成がなされており、盛土(10cm)、耕土(20cm)、床土(5cm)、灰茶色砂質土(遺物包含層5cm)と、第3地点と同じである。検出された遺構は、井戸・1、溝・2、落ち込み遺構、少數のピットなどがある。

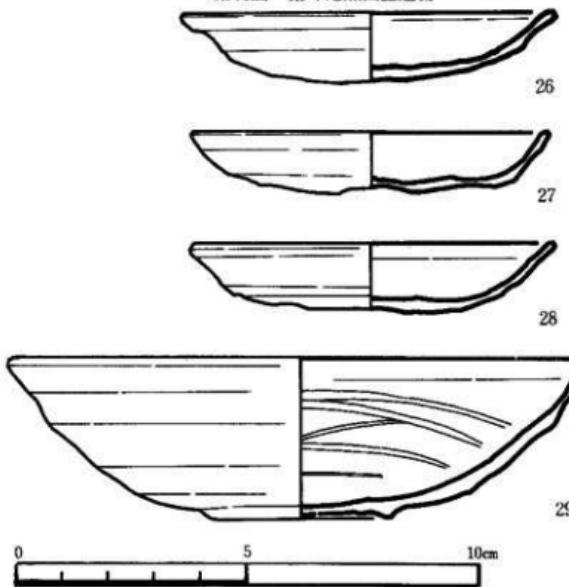
井戸 直径1.5m、深さ90cmを測り、底に行くほどせばまるスリ鉢形を呈している。堆積土は、上部では茶灰色砂質上と造構面にほぼ同じで、下部では暗灰色粘土となっていた。井戸内から平瓦の細片を少量検出したのみである。

溝1 南北方向に流路を持ち、幅30cm、深さ5~10cmである。その北寄りでは消滅し、南側では落ち込み造構に接続し、そこに注ぎ込むレベルを示している。少量の瓦器細片が出土遺物としてあげられる。



第15図 第4地点出土遺物

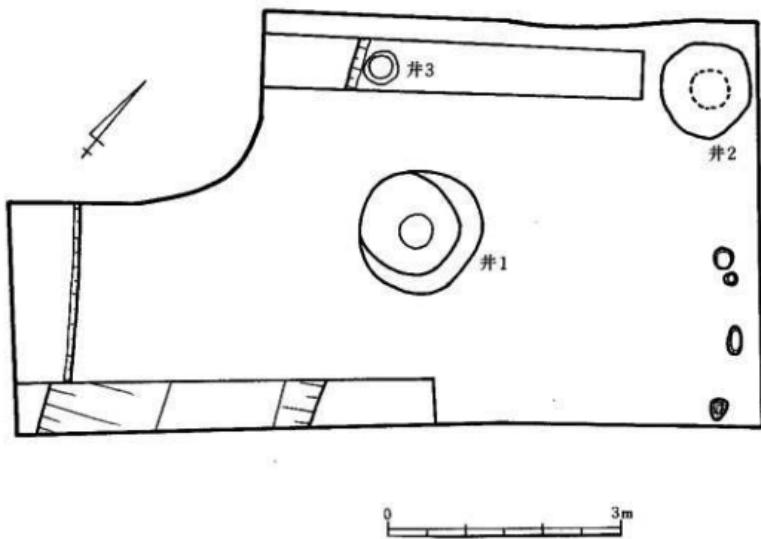
溝2 北東から南西に流路を示し、南西側では、溝1同様落ち込み造構に流れれるよう継ながっている。幅20cm~30cm、深さ5cm~10cmの規模である。遺物は、須恵器細片と瓦器細片が出土したのみである。



第16図 第4地点出土遺物

落ち込み造構 南側に位置し、形は不整形である。幅約3.5m、深さ20cm~30cmとゆるい傾斜を持つ。出土遺物は、平瓦片、瓦片、スリ鉢片、瓦器、上師質及び瓦質小皿などがある(24・25・26・27・28・29)。

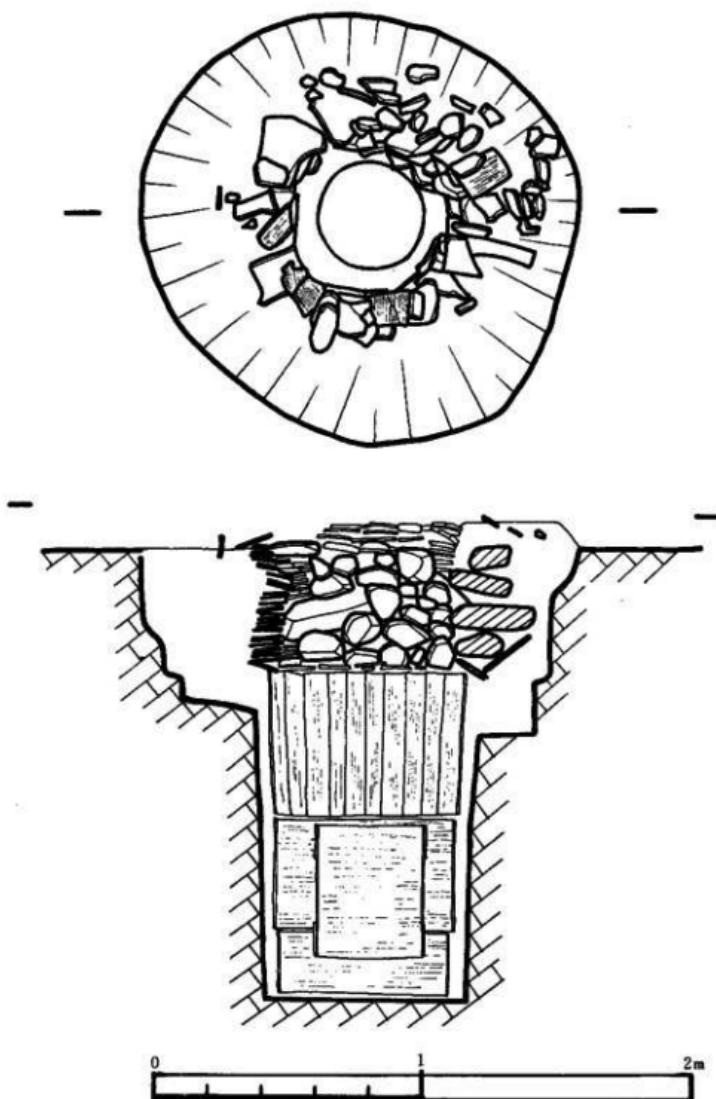
ピット 調査地の中央を流れる溝2の西側に点在する。直径20cm~30cm、深さ5cm~20cmの規模のものであり、ピット内に根石を置くものがある（第14図 点線のピット）。



第17図 第5地点遺構図

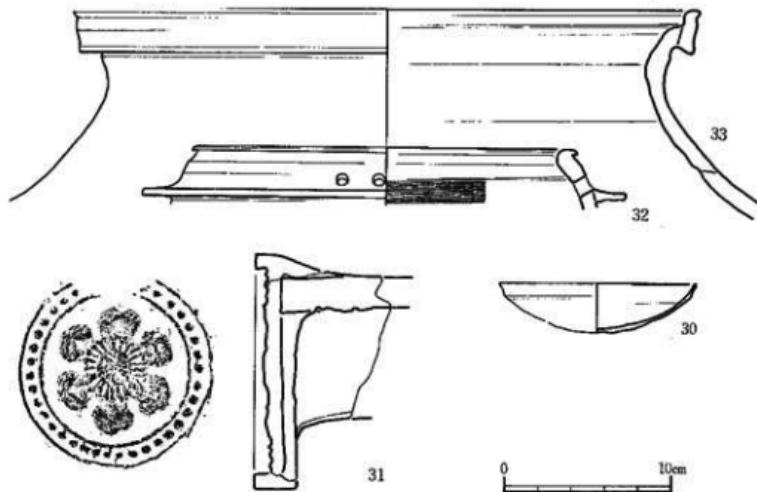
第5地点 泉大津市豊中655・656

住宅建設に先立つ事前調査である。既に盛土がなされ、ちびっ子広場として活用されていた。層序は、盛土(90cm)、耕上(20cm)、床上(5cm)でその下に遺構面(灰茶色砂質土)が確認された。検出された遺構は、井戸が3、ピットが4である(第17図)。



第18図 第5地点井戸1

井戸 1 調査地のほぼ中央に位置し、上面で直径1.5mの掘り方を持つ。井戸自体の直径は50cm、深さ1.7mを測り、井戸枠は三段からなる。上段は、平瓦を積みあげているが、西半分は壊れた後



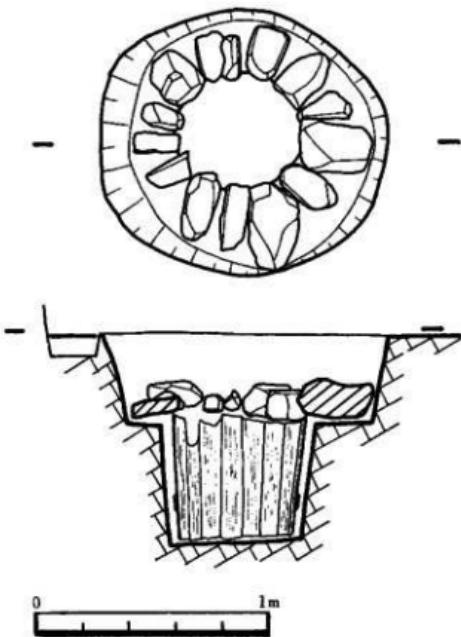
第19図A 第5地点井戸1出土

に20cm大の河原石を積んで補修を行なって
いる。出段は、杉板（長さ55cm、幅10cm）
を22枚縦に使用して、上部直径75cm、下部
直径70cmの規模を持つ。下段は、曲物3個
が使われている。それは、直径63cm、高さ
25cmの曲物に、直径65cm、高さ40cmのもの
を上へ積み、その内側に直径40cm、高さ50
cmのものがはめこまれ二重になっていた（
第18図）。井戸内堆積土は、茶灰色砂質土
で瓦片が混じり、その下は粘土、砂となっ
ていた。出土遺物は、瓦器（30）、平瓦、軒
丸瓦（31）、土釜（32）、常滑甕（33・34）な
どである。

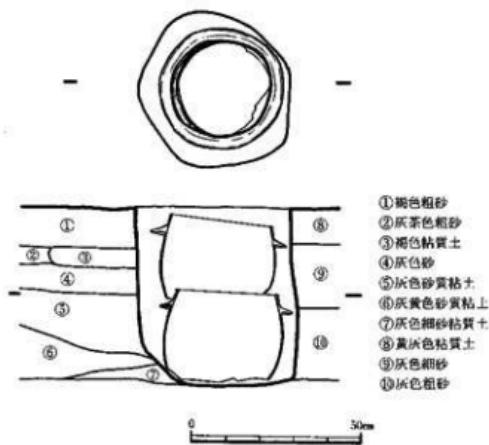


34

第19図B 第5地点井戸1出土



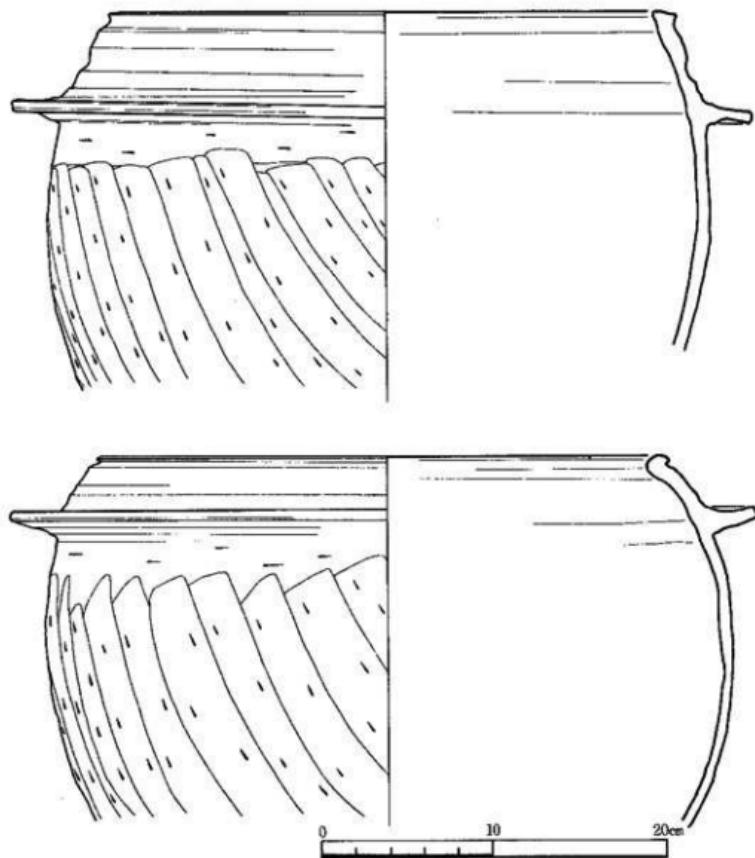
第20図 第5地点井戸2



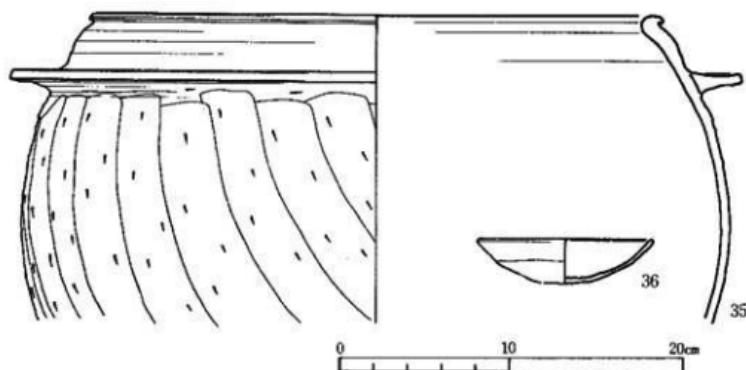
第21図 第5地点井戸3

井戸2 北隅に位置し、上部は石組み、下部は杉材の樽で井戸枠が作られている。直径1.3m、深さ90cmを測る規模である(第20図)。平瓦片が井戸内より検出された。

井戸3 井戸1の西に位置する(第21図)。直径40cm、高さ25cmの大きさの土釜の底部を穿ち、2段に積み重ねられた井戸である(第22図)。出土遺物として、土釜片、瓦器片がある(35・36)。



第22図 第5地点 井戸 3井戸枠



第23図 第5地点 井戸3出土

第4章 まとめにかえて

豊中遺跡の発掘調査も今年で3年目を迎えた。その調査面積も、確認されている遺跡の範囲からすれば、ほんの一端にすぎず、しかも、住宅建設の事前調査であるため、全貌を明らかにするにはあまりにも資料不足である。しかし、わずかづつではあるが、明らかになってきた面もある。それによると豊中遺跡は、古墳時代と中世の集落が主であるが、そのあり方にも、おのづから違いが認められる。すなわち、古墳時代には、竪穴住居を中心に掘立柱建築が一単位となり、いくつかの単位が分散してみられた。今回報告の第2地点がそれにあたり、古墳時代の集落を解明する上で貴重な資料である。なお第1地点においても、住居跡の存在が予想されたのであるが、調査の結果、住居跡は見られず、同時代の井戸が検出され、付近に住居が存在していたと想定される。個々の竪穴住居についても軸が時代毎に、ほぼ一定の方向を向くことが現時点で確認されている。すなわち、庄内式土器の時期には北西を指し、布留式土器の時期にはほぼ北を指しているが、断定することは出来ず、今後の問題点としてあげておく。中世は第3・第4・第5地点が集落として形成され、付近には「大福寺」、「小寺」の字名が残り、寺院が建立されていたと考えられる。この時期の建築跡で明確なものは発見されていない。しかし、生活していく上で欠かすことの出来ない水、それを供給する井戸がまとまって発見されている。これは個々の家々に井戸を持っていたと考えるよりは、地下水位の浅い所、水脈のある所を選定して、その地域に井戸を掘ったと思われる。それが第2・第3・第4・第5地点であるが、同時期に全てが併存していたとは出土遺物から見て考えられず、一時期をとればその数は少なく、共同井戸と考えることも可能である。

豊中遺跡の古墳時代・古代・中世における集落の復元作業および社会性の追求には、関連諸科学からのアプローチも必要である。しかし、現在では考古学的にみても、まだまだほど遠いが、資料提供として本書でもって報告しておく。

注① 四ヶ池遺跡、大園遺跡、池上・曾根遺跡、豊中遺跡、古池遺跡、板原遺跡、栄ノ池遺跡、土生遺跡など。

注② 泉大津市域では、東雲遺跡、板原遺跡、虫取遺跡がある。

注③ 和泉市史 第一巻 1965 和泉市史編纂委員会

注④ 豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅢ 1976 豊中・古池遺跡調査会

注⑤ 岸和田市森木八幡山遺跡の研究 1965 岸和田市教育委員会

注⑥ 府立泉大津高等学校地歴部所蔵

注⑦ 七ノ坪遺跡発掘調査概要 1974 大阪府教育委員会

注⑧ 婆池遺跡発掘調査概要・1 1975 大阪府教育委員会

第5章 遺物

第1地点

井戸 1

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調 整	胎 上	焼 成	色 調
1	甕	口径 14.8 器高 24.8	口縁端部内側にフクラミを持ち、体部は丸底で、やや横円形を示す。 体部上方に米粒大の剥落痕が5cm幅で全体を回る。外面、横・斜日刷毛・内面、横足削り。 体部外面にスス付着。	砂粒が多く混る	良	灰茶色

井戸 2

2	小型丸底甕 (土拂器)	口径 9.2 器高 8.8	斜口上方に広がる口縁と、球形に近い体部を持つ。 口縁内・外面はヨコナデ、体部外斜日刷毛。 内面は、素削り。	やや砂粒が多く見られる。	良	赤茶色
3	*	口径 9.0 器高 8.9	斜口上方に広がる口縁と、球形の体部を持つ。 口縁内・外面はヨコナデ、体部外斜日刷毛。 内面は見削りと思われるが剥離が激しく不明。	やや砂粒が多く見られる。	良	赤茶色
4	*	口径 7.4 器高 8.2	斜口上方に広がる口縁と、やや球形の体部を持つ。 口縁の内・外面はヨコナデ、体部外表面は刷毛。内面は、指汗痕が見られ、その上をナデである。	やや砂粒が多く見られる。	良	乳白色
5	*	口径 9.4 器高 6.2	斜口上方に広がる口縁と、横広がりの体部を持つ。 口縁外表面はヨコナデ。内面は、丸ナデ(丸おさえ)されている。 体部内面は、指汗痕上にヨコナデ。 外面は、斜目刷毛が施されている。 内・外面に化粧土が塗られている様である。	細砂が多く見られるが、少量の砂粒も含む。	良	赤茶色
6	*	口径 8.8 器高 9.5	斜口上方に広がる口縁と、球形の体部を持つ。 口縁の内・外面はヨコナデ、体部外表面は、斜目刷毛。 内面は指汗痕上にヨコナデがされている。	やや砂粒が多く見られる。	良	赤茶色
7	*	口径 8.7 器高 8.6	斜口上方に広がる口縁と、球形の体部を持つ。 口縁の内・外面はヨコナデ、体部外表面は刷毛が激しく不明。内面はヨコナデ。 体部中位に斜門形(1.4×1.1)の穴がある。	細砂が多いが、砂粒も少量入る。	やや良	灰茶色
8	壺	口径 9.6 器高 7.6	斜口上方に広がる口縁と、球形の体部を持つ。 口縁と体部の比率は1:1の割合。 口縁の内・外面と体部の内面はヨコナデで、外表面は器でナデしている。	細砂の多い精良な胎土使用。	良	灰茶色

井戸 3

9	高杯(杯部) (土拂器)	口径 17.6 杯高 5.5	やや丸味を持ち、斜口上方に広がる杯部である。 内面はヨコナデである。整形模も認められるが剥離が激しく不明。 外面は経刷毛で施されるが、部分的にヨコナデで消されている。	砂粒が多い。	やや良	灰茶色
---	-----------------	-------------------	---	--------	-----	-----

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調 整	胎 土	焼 成	色 調
10	増 (土師器)	口径 6.6 器高 7.3	やや上方に広がる口縁と、やや楕円形の体部からなる。 内・外面の削離が激しく、整形は不明に近いが、体部外側でヨコナデが見られる。 口縁から体部にかけ、部分的に黒斑が残る。	細砂の多い精製された粘土。	良	やや赤茶色

井戸内上面よりの出土である。他にも、甕の破片も多く含まれる。

井戸 4

11	小型丸底甕 (土師器)	口径 10.2 器高 11.5	斜目上方に広がる口縁と球形の体部からなる。 口縁内側は、頸部近くに斜目刷毛、そして頸部近くまで横窓削りされている。刷毛上にヨコナデもされている。 外面は横窓刷毛、体部内面は、ヨコナデが主で底部近くに窓削りが見える。外面は斜目刷毛(左→右)が施される。	金雲母の混む粘土で、やや砂粒も入る。	良	暗茶色
----	----------------	--------------------	---	--------------------	---	-----

井戸 5

12	小型丸底甕 (土師器)	口径 8.5 器高 9.1	斜目上方に広がる口縁と、球形の体部からなる。 口縁内側は、横窓刷毛、外面は、横窓刷毛上にヨコナデされている。 体部内面はヨコナデが施される。 外面は、窓ナデが全体になされているが、頸部下に部分的に刷毛目が残る。	細砂の多く含む粘土であるが、砂粒も少量含む。	良	灰暗茶色
----	----------------	------------------	--	------------------------	---	------

井戸 6

13	小型丸底甕 (土師器)	口径 8.4 器高 8.0	斜目上方に広がる口縁と、やや球形の体部からなる。 口縁内側は、ヨコナデ、体部内面は、ヨコナデと底近くで、尾おさえ痕が見られる。外面は中位下に横窓削り(左→右)が見られる。	精良な粘土を使用するが、少量の砂粒も含まれる。	良	乳茶色
14	増 (土師器)	口径 9.0 器高 7.0	斜目上方に広がる口縁とやや球形の体部からなる。 体部内面全体と外面(1.1段)はヨコナデにより頸部下は横窓削りにより施されている。	細砂の多い精良な粘土。	良	乳茶色
15	把手付瓶 (須恵器)	口径 7.5 器高 7.3	窓削りされた平底より、上方に広がる器体を持つ。 液状文は、三段に分れ各1段は7本である。			

第2地点住居跡

炉跡内

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調 整	胎 土	焼 成	色 調
16	壺形上器	口径 20.0 器高 不明	くの字形に折れ、ややカーブをなす広がる口縁を持つ。 折れ曲がる所に円形浮文(6mm)が約1cm隔で残る。内面は、櫛窓研磨と櫛窓研磨が見られる。外面は、ヨコナデと頸部に櫛窓研磨が施されている。部分的に窓削り下に刷毛目が残る。	細砂の多い粘土。	やや良	やや白茶色
17	*	口径 16.7 器高 不明	くの字形に折れ、上方に立つ口縁を持つ。 口縁外側に、凹・凸を持つ。内・外面ともヨコナデによる。	細砂の多い粘土。	良	乳茶色

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調整	胎 土	焼 成	色 調
18	壺形土器	口径 22.7 器高 不明	頸部から斜口上方に広がり、さらに横へ広がる山線を持つ。外面端部下に幅1.5cmの波状文を持ち、頸部下に帯を有す。 刻離が激しく、整形は不明。	細砂の多い粘土。	良	赤茶色

井戸内

19	瓶 (瓦器)	口径 15.0 高台径 5.8 器高 5.7	底からカーブをなし、斜口上方に広がる。高台は比較的シッカリしている。 内・外に粗雑であるが横罫暗文(?)が入る。	細砂の多い粘土。	良	内・外とも灰黒色
20	*	口径 15.2 高台径 5.2 器高 5.2	底からカーブをなし、斜口上方に広がる。 高台は、シッカリしている。 内・外に粗雑であるが、横罫暗文(?)が入る。内面底部に、平行暗文が残る。	細砂の多い粘土。	良	内・外とも灰黒色

第3地点

井戸内出土

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調整	胎 土	焼 成	色 調
21	均整唐草文 軒平瓦 (須恵質)	瓦 当 肉 厚 5.5 半瓦部 22.0	アゴが大きい。瓦当は左右に反転してのびる唐草文を持つ。軒は、軒隅に置く二角形を呈し、平瓦端部は上面に約8mmほど出ている。その瓦部末端にクギ穴が見られる。	砂粒が多い。	普通	灰 色

井戸枠使用平瓦

22	均整唐草文 軒平瓦	全長 不明 肉厚 4.1	アゴの凸がなく、瓦当部でやや肉厚になる程度である。瓦当面は、中心部が外向きC字状を呈しそのまま、つる草状に力強く左右に三反転してのびる唐草文を持つ。各反転部内面に、粒状文がある。 半瓦部下面に布目、上面に剥離り。	細砂が多い。	普通	灰黒色
23	複弁八葉蓮 華文軒丸瓦	口径 15.1	肉厚す中房上に1+5の蓮子を配し、その周囲には雄蕊帶をめぐらす。また複弁八葉蓮華文の周囲には1本の蓮軸、周縁は幅約1cmである。丸瓦部内面は布目以上に剥離りされ、瓦当との接合部内面は横指ナメ、瓦当裏面は粗い瓦ナメ。 外面に炭素が付着、瓦当面に砂粒が付着。	細砂が多い。	普通	灰黒色

第4地点

方形落ち込み内

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調整	胎 土	焼 成	色 調
24	壺 (瓦 質)	口径 32.2 器高 不明	胴部に平行タタキ目を配り頸部より上方にやや立ち、頸部近くで横に広がる口縁を持つ。 口縁は、内・外ともヨコナナデ仕上げ。	やや砂粒の混る粘土使用。	良	灰黒色
25	木 リ 跡 (須恵器)	口径 27.2 器高 10.3	平底で、斜口上方に広がり端部近くでやや上方に立つ。 内・外ともヨコナナデ仕上げ、底部に糸切り痕が残る。	砂粒の多い粘土	やや良	灰 色

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調整	胎 土	焼 成	色 調
26 28	皿	口径 7.8 8.2 器高 1.4 1.5	平たい底より、斜口上方に広がる口縁を持つ。 内面全体と外側の一部にヨコナデが他は指圧痕が残る。	細砂が多い。	良	茶白色
29	碗(瓦器)	口径 12.8 高台径 3.8 器高 3.6	底よりカーブをなし斜口上方に広がる。 内面に羅略文(?)が見られる。 高台は粘土ヒモを周わたるものである。	細砂の多い粘土使用。	良	灰褐色

第5地点

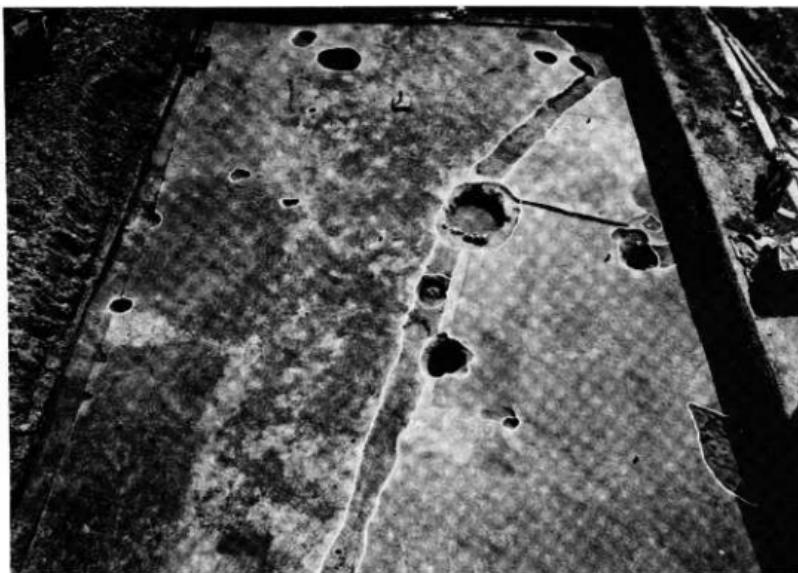
井戸1

No.	器 形	大きさ(cm)	整 形・調整	胎 土	焼 成	色 調
30	瓶(瓦器)	口径 12.0 器高 3.1	底部よりカーブをなし斜口上方に立つ。	細砂とともに砂粒も少量見られる。	良	灰白色
31	單弁六葉蓮華文軒丸瓦		やや肉厚の少ない平坦な文様構成が特徴。 中房上の蓮子は不明。その周囲には羅略文をめぐらす。單弁六葉蓮華文の周囲には、櫻紋が1本めぐらる。その外に蓮華文37~8個あり、外側に1本の櫻紋。同様は失われ不明。 丸瓦部内面は荒削り、瓦当との接合部は指ナデ。 瓦当裏はヨコナデ、瓦当面に砂粒が付着。	砂粒と少量の石粒(5×5mm)が混る。	普通	灰色
32	土 壺 (土師質)	口径 23.3	内傾する口縁部、短くくの字形に外反する。 つばは、水平。外側の口縁部、口縁つばは横ナデ。 内面、横刷毛をほどこす。穴は2個。			
33	甕 (常滑焼)	口径 37.8	底部より、外反する口縁端部で外側に粘土を接合し凸帯としている。	細砂とともに、少量の砂粒が混る。	良	茶色
34	*	胴部片	頸から胴部、張り出しにタタキ目文様を施し、上をタテ荒削り、外側つば下に厚くスグスが付着。	*	良	茶色

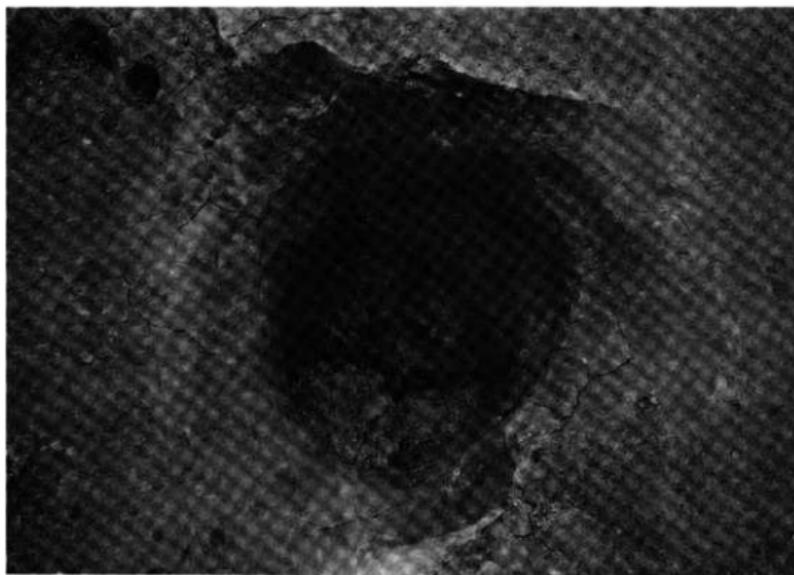
井戸2

35	土 壺 (土師質)	口径 33.0	内傾する口頭部、つば上よりくの字に外反する。 つばは、やや上向き。口縁外面、つばは横ナデ。 胴部内面、横羅ナデ。外側つば下に横窓削りをし、上にタテ削り。	細砂が多いが少量の砂粒	良	赤茶色
36	瓶 (瓦器)	口径 10.0 器高 2.6	底部には高台が無く、器体は半月状を呈す。	細砂が多く、中に少量の砂粒も含む。	良	内面・灰黒色 外面・灰色

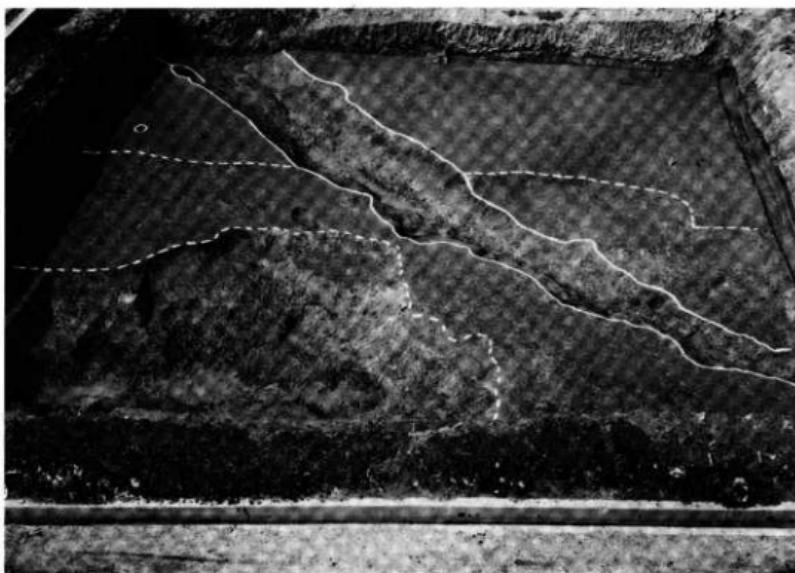
図 版



第1地点 造構



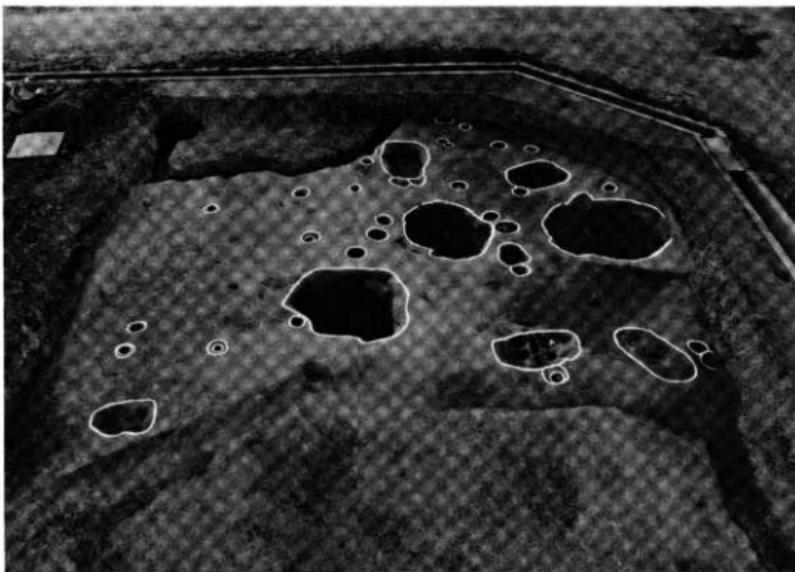
第1地点 井戸1



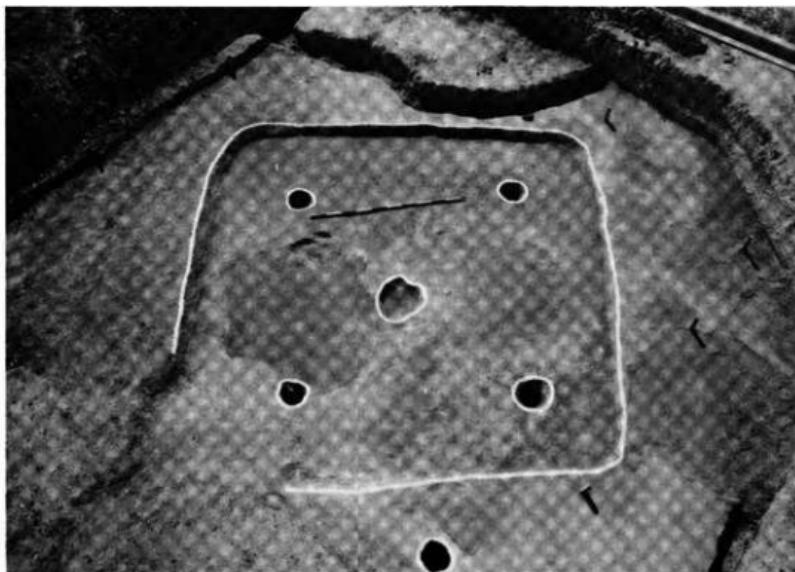
第1地点 造構



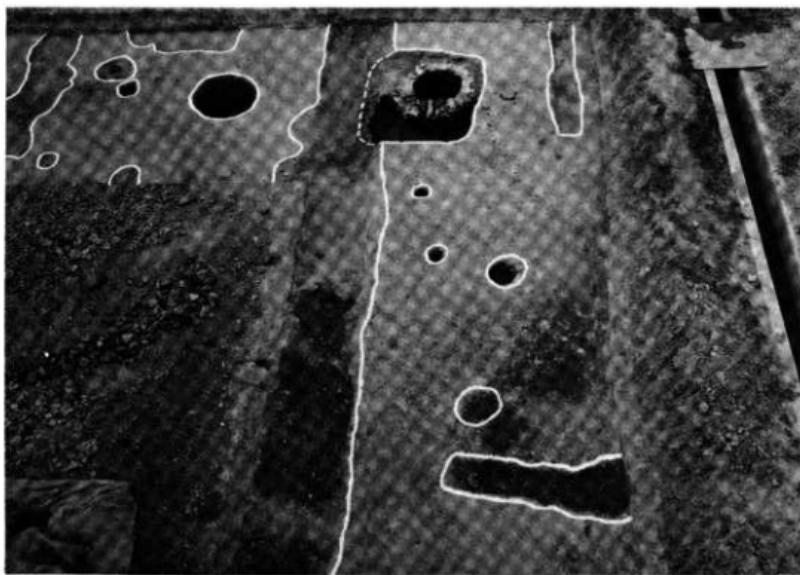
第1地点 井戸6



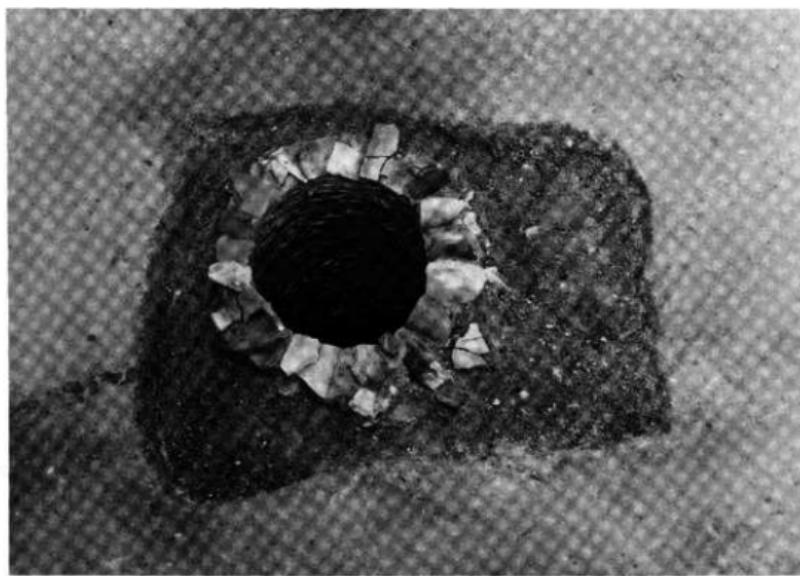
第2地点 中世遺構



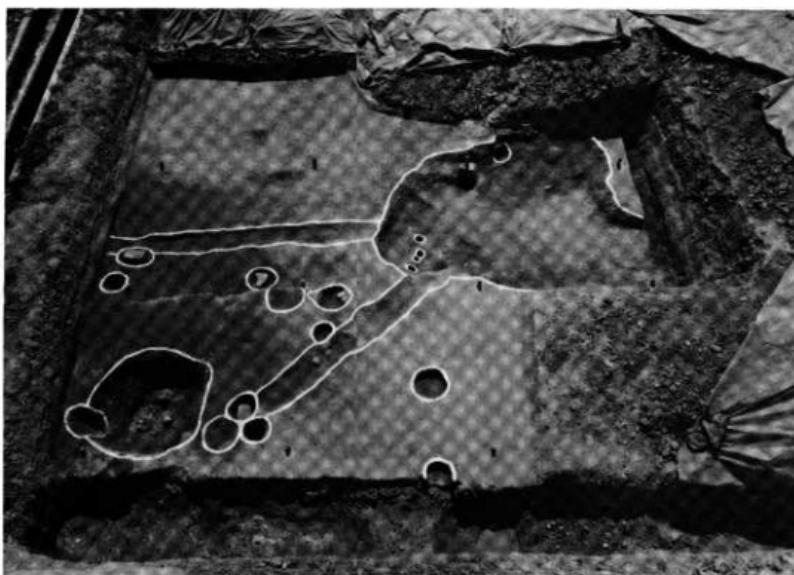
第2地点 住居跡



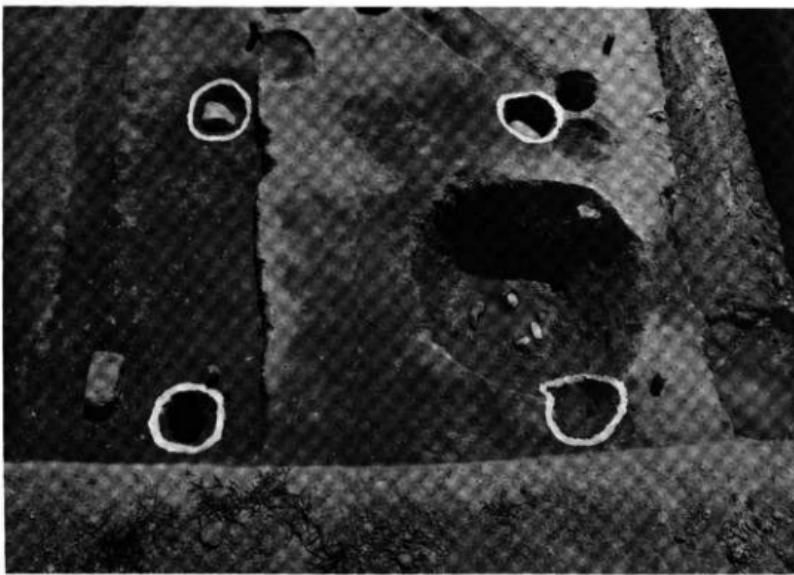
第3地点 遺構



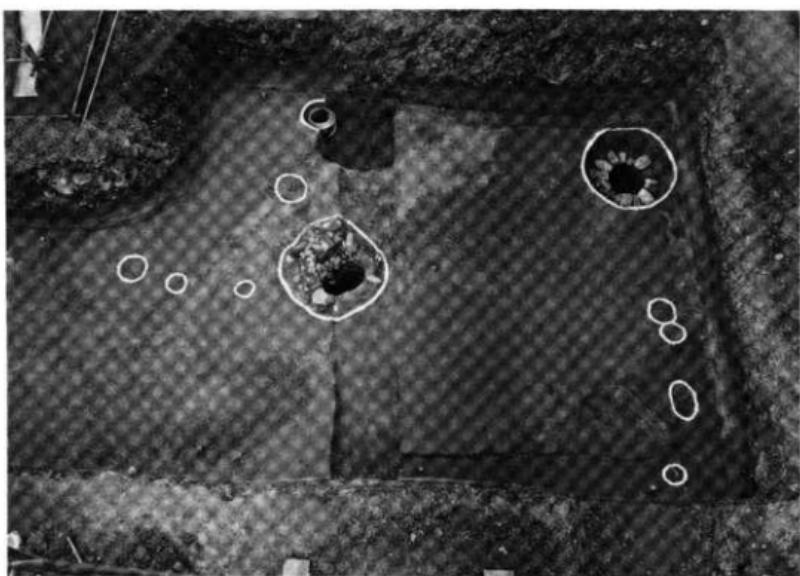
第3地点 井戸 1



第4地点 造構



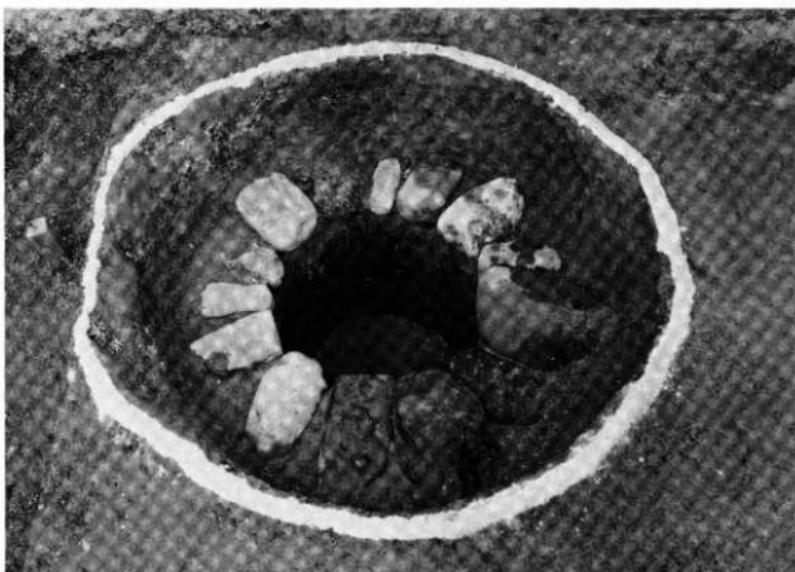
第4地点 井戸 1



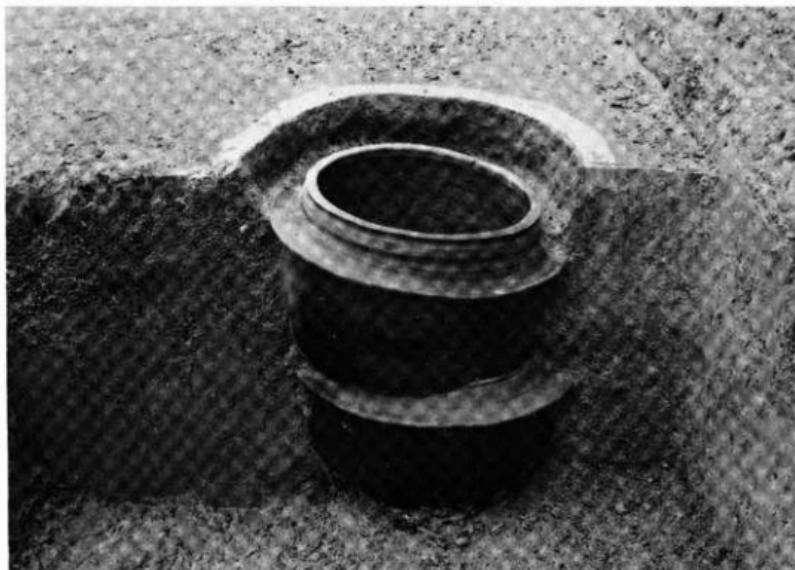
第5地点 遺構



第5地点 井戸1

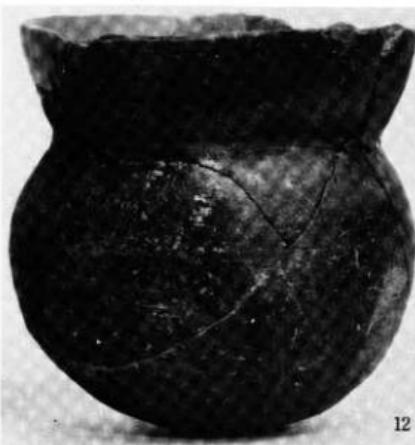


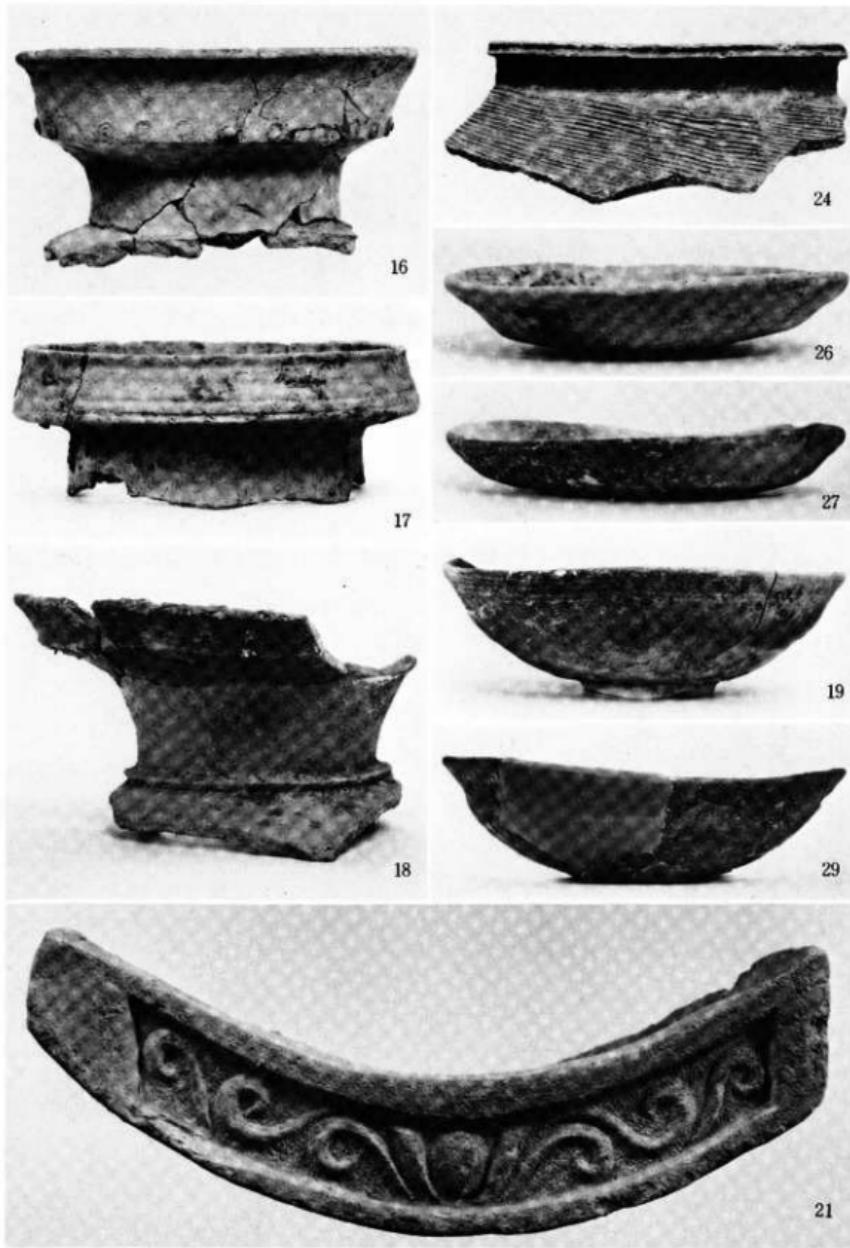
第5地点 井戸2



第5地点 井戸3









23



31



22



34



33

泉大津市文化財調査概要 3

豊中遺跡発掘調査概要 II

昭和53年 3月

発行 大阪府泉大津市東雲町 9-12

泉大津市教育委員会社会教育課

印刷 大阪市東成区深江南二丁目六番八号

株式会社 中島弘文堂印刷所

